

安土町地域自治区長だより

No.57 平成 25(2013)年 7月 7日(日)

発行 安土町地域自治区事務所
(安土町総合支所)

◇老蘇小ビオトープ整備作業

6月16日(日)、4年に一度の大整備作業が実施されました。ビオトープの整備と同時に「生き物調査」も行われました。



◇老蘇コミセン設計業者との協議

6月17日(月)、コミセン建設委員会・まちづくり支援課・まち協のメンバーが設計業者と新コミセンについて意見交換を実施。



◇住みよいまちづくり人権講座

今年も安土町総合支所にて開催し、多くの方々に参加いただきました。



◇安土学区まち協役員と議長面談

6月21日(金)、安土学区拠点検討委員会のメンバーが、市長と議長に面会・懇談されました。



◇西の湖一斉清掃活動

6月23日(日)、市民団体から100名以上の方々が参加され、環境整備活動として、西の湖周辺等の清掃活動に取り組みました。



やすらぎホール前で野田会長挨拶

◇第1回 西の湖夕日コンサート

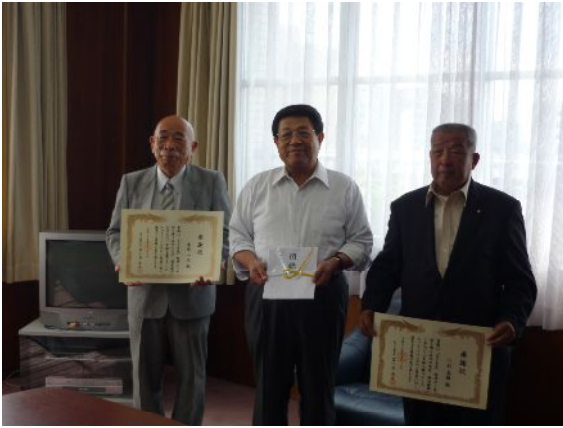
6月23日(日)、午後6:30から開催。“やすらぎホール”のPRと利活用を促進するために企画された事業の一環。ワークショップやコンサート等を通して、市民に親しみの持てる場となることを目指します。



◇「天下布武」歌碑寄贈について

6月27日(木)、歌手鳥羽一郎の「天下布武」歌碑建立に際して、市長から感謝状の授与がありました。

三村善雄・水原一夫両氏に感謝状が渡されました。また、両氏から市へ10万円の寄付も戴きました。



👉 水原さん・市長・三村さん



👉 文芸の郷に建立された歌碑

◇老蘇小グランド芝生化作業

6月29日(土)、運動場全面を芝生化するため、芝の植込みが行われました。老蘇小の児童や保護者、学区の方々等総勢約400名が参加し汗を流しました。9月の運動会には、芝生の上を走る姿が見られそうです。



👉 芝生を植える様子

◆ 視点 ◆

・七夕や 伝送されし 人の恋 (一教)

これは、いまどきの姿か。七夕は中国古来の伝承行事で、「ささのは、さーらさら」という童謡がある。辞典では「アルタイルとベガが天の川をはさんで接近するのを、年一度の逢瀬に見立てて庶民の行事になった」と書いてある。ゴミセンや保・幼・小では、この日のために「笹竹」を教室や玄関に持ち込み、「短冊」に願いごとを書いて飾るのが恒例になっている。人間の情の世界の表れである。

・先だって、「天下布武」の歌碑の寄贈をされ、市長から感謝状をもらった安土のMさんから本を戴いた。『道—この未知なるもの』200ページに及ぶ随筆集である。その中には、日々感じられたことがまとめられており一気に読ませていただいた。本には、「私自身、舗装されていない道を歩んできました。そこには石ころがころがっていたり、穴だらけであったり、砂煙が立っていました。」と、小さい頃の思い出が行間にあふれ出ている。少年期の体験がその後の人生に大きく影響を与えたようにも感じられる。

・この本の「七夕」という見出しの文には、「七夕の頃になると、ナスやキュウリ一夜漬の香りと共に、母が話してくれたことを思い出す。『織姫さんが牽牛さんと結婚し、機を織るのを怠ったため天帝が怒り別居させた…。それを見たサギの一種のカササギという鳥が、天の川に翼を並べて橋をつくり、二人を逢わせただよ』。こんな話が鮮明に記憶に残っている。」と書いておられる。

そして、現在では、「一夜漬は、インスタントの素」、「笹竹はプラスチック」。果ては、子どもから「カササギという鳥が大気圏外で生きられるものか」との反応に苦笑される。しかし、「いかに時代が変わっても、親から子、子から孫へ語り継ぐべきものは語り続けたい。」と結んでおられる。

・今、安土・老蘇学区まちづくり協議会の幹事のメンバーはMさんと同年の方々が多く、この方たちのお世話で進んでいるともいえる。今は基礎固めの時期である。基礎づくりができれば、次の世代へ引き継がれる。『道—この未知なるもの』のごとく、未来に向かって石ころに躓き、穴にはまりつつ、砂煙にまみれても一歩一歩進んで、「自分たちの地域は、自分たちで守り育てる」という精神が引き継がれ、「安土創発」「つながりと出会いのまちづくり」が実現できるものと信じている。 (K)